

学位記

和田秀敏

博士号は「足の裏の飯粒」と揶揄され、とらなくても何の差支えはないがとらなないと落ち着かず、いまだ医者になつてからの一つの目標になつてゐる。

昭和五十一年の春、M県の県立病院の任期があと一月となつた時、地元へ帰れる嬉しさとともになんとも言えない複雑な思いが胸をよぎつた。いったい大学に戻つて何をすればよいのであろうか。卒業して五年も経つのに明らかな研究テーマも決まつておらず、そればかりか医局の研究チームにも属してゐない。大学でこのまま何らかの研究生活を送るにはあまりに荷が重過ぎるような気がする。出張病院でわずかな期間ではあつたが一人前の医師として扱われると、「世間は与し易し」と錯覚し、出来ればこのまま病院の勤務医を続け、将来は父の跡を継いで一開業医となるであらう自分にとつて、これ以上の勉強が必要だらうかと安易に考へてゐた。

しかし、その一つの足かせは戦前戦後の動乱期に不本意な医局生活しか送れなかつた父の「息子は大学人として研究生活を送つてほしい」という期待であつた。父は戦前、九州の医学専門学校を卒業し、昭和十一年卒業と同時にK帝国大学医学部の皮膚泌尿器科医局に入局した。

当時の医専出身者に対する身分差別はあからさまであつたものの、それでも何とか六年間の研究生活を送れたのは、戦局も押し迫り不安定な時代で、さらに健康な医局員は次々と徴兵され戦地に送り込まれ、教室は教授を残してもぬけの殻で医局を維持していくためには誰でもその場しのぎで良かったのかも知れない。徴兵検査を受けたものの小柄で本来病弱な父は丙種合格で徴兵を免れ、専門学校卒業というハンデを背負いながら、昭和十八年W市の公立病院に出張を命じられるまで研究生活を送り、出張病院で終戦を迎えた。

わずか六年間の医局生活ではあつたが、その間医局員は次々に出征し、入局して間もない医局員にも重要な任務が仕方なく与えられた。その間真面目な性格の父は教授の下働きとして、寝食忘れて勉学に励んだようだ。父は病院から戻ると、毎日そのまま一階の自室に上がり深夜まで机に向かつたと、当時同居していた祖母は父の勉強ぶりを死ぬまで誉めたたえ、孫への教訓にしてきた。

いよいよ宮崎から帰省する間近、父の家の引越しの手伝

いのため一時的に福岡へ戻った。荷造りを手伝う中、父の書齋の本棚から多くの医学書の中に埃をかぶった製本した青表紙の論文集を見つけた。興味本位でのぞいてみると、何と父が書いた百編あまりの医学論文が年代順に綴じてある。内容はともかくその圧倒的な論文の数に言葉を失った。時代が時代だったとはいえずか六年間にこれだけの仕事をしたのである。多くは教授の下請けであったかもしれないが、学位取得のための主論文と思われる何ページにも及ぶ大作もみられる。この論文集を手にとった時から、なんとなくもう一度大卒に戻ってみようと再び決心した。

父は昭和二十年二月、もはや敗戦間近のころ医学博士の博士号を授与した。この博士号授与を一番喜んだのは祖母である。過去にあまりこだわらない父は両親の遺品のほとんどを早い時期に整理していたが、わずかに残された祖母の遺品の中にW市の父に死てた古いはがきが一枚残されていた。ありきたりの季節のあいさつの後「万歳 万歳 万歳……」と八ガキの裏表に余白が殆ど見当たらないように一面に書かれている。博士号取得を伝え聞いて息子に送った喜びの手紙であり、父もこれだけは捨てずに大事にとっておいたようだ。祖母は明治の女らしく息子が「末は博士が大臣」になることを一番待ち望んでいたことであろう。

戦後医局員の多くは戦地から復員してきたが、もはや学位

を取得する意欲や機会を失い腰かけ程度の医局生活の後開業する者が多かった。そこで父の学位は多くの医局員の妬みの対象になったようだ。

「われわれは戦地に駆り出され、九死に一生を得復員したにもかかわらず学位も取得できなかった」戦争にもいかずその間博士号を取得するのはいかなものか「帝国大学卒業者でも学位を取得できないでいるのに、専門学校卒の医局員が先にもらうとは」など陰口をたたかれた。

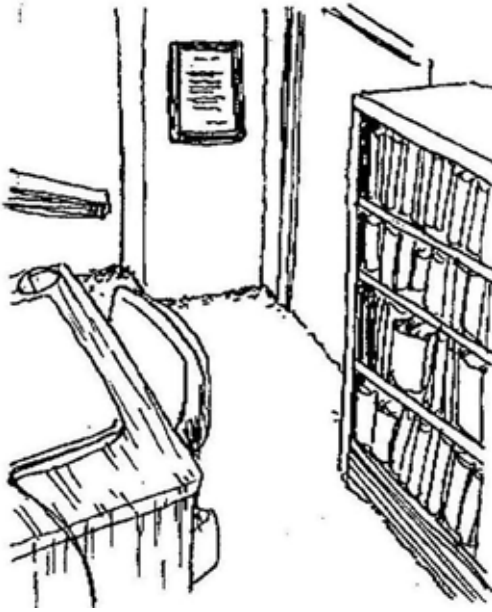
昭和二十一年十月、父は教室を辞し福岡でささやかな診療所を開業した。開業と同時に学位記を額装し診察室の一番目立つ東側の壁の高い位置に掛け、学位記はその後四十年あまり診察室を俯瞰していた。真面目以外これといって取り柄のなかった父にとって陰口はたたかれようと学位記は一番の自慢であり誇りであったのだろう。

M県から教室に戻り臨床に追いまくられたが、その合間合間に研究らしきものに取り掛かった。およそ八年が経過してもうすぐ不惑を迎えようとする頃、教授から「このまま大学に残って勉強する気があるのなら今までの実験データを論文にまとめ学位を取得しなさい」との命令を受けた。

これまで医学博士号取得は心の片隅に漫然と気には留めていたが、さほど重要なものとは考えていなかった。これからまとめる医学論文が学問的にはどれだけ価値があるだろうかと

また今後とも急速に発展する臨床医学知識に追いつくだけでも精一杯なのに論文書きのための時間があるのだろうか、
思いは巡り積極的に取り組む気にはなれなかった。

学位を取得するか否かは今後とも教室で勉強を続ける約束手形にはなりえるかもしれないが、今日専門医の資格の方が臨床には有用で、医師の資質としては重要なことは周知の事実である。日本の医学教育の根本となったドイツでは学位制度はすでになくなっているし、米国でも日本の医学博士にあ



たる PhD を取得するのは非常にまれである。

しかしここにもあまり物言わぬ父の期待があった。何とか丸一年を費やし研究データをまとめ学位論文を仕上げ、滞りなく審査も通過し学位を授与されることになった。昭和六十七年七月、学位授与式に出席するため本学の学長室に向くと、二十人余りの学位授与者が集まり、そこには医学部の大学院を卒業したばかりの若い昔の教え子数人と目が合い、伏し目がちに挨拶を交わしたが、他学部への授与者は押し並べて高齢者が多く幾分安心した。会場は喜びのためか浮足立った雰囲気ではあったが、一人醒めている自分がなんとも場違いであった。

学位記を携え母屋の父を訪ねると普段寡黙な父が急に饒舌となり喜びをあらわにしたのは驚きであった。父は診察室から額装された自分の学位記を開業以来初めて降ろしてきて、息子の学位記と並べ、満悦の表情で、あれこれ二つを見比べてはほくそ笑んでいる。学位記を前にして一仕事をした安堵感はずかしくもあったがそれほどの喜びはなかったし、むしろ父が喜んでくれて少しばかりの親孝行ができたころの方が嬉しかった。その日を境に診察室から降ろされた父の学位記は一度と同じ場所に戻される事はなかった。

確かに博士号は「足の裏の飯粒」であった。それからしばらくして開業し、学位記はなんの役にも立たなかった。

し、他人に公言する機会もなく、その存在さえ忘れかけていた。父はその後も学位記が外された診察室でしばらく開業を続け平成十四年の暮引退し、それから三年して学位取得をあれほど喜んでくれた父も亡くなった。

父が亡くなったのち遺産や数々の残務整理に追われ、何とか一段落したころ、父が一番大切に、誉に思っていた父の学位記はどうしたのだからとふと思った。それから時間をみつけ押し入れや倉庫の中を探してみたが見当たらない。散々探した茅句、あれほど大切にしていたものに倉庫の片隅の段ボールを重ねた真下に無造作に置かれていた。額装のガラスの誇りを手で拭いながら、父は自分の学位記を息子への橋渡しをしたかったのではないかと思った。息子が学位記を授与されそれで自分の仕事は終わったものと、あつさり診察室から降ろしたのだろう。

さて自分の学位記はどうしたであろうか。もはや授与されてから二十年も経っている。気になって押し入れの中を捜すと埃まみれの紙筒におさめられた学位記が出てきた。両手で広げ、さてこれをいったいどうしようかと思ひ悩んだ。もつ一度紙筒におさめて押入れの中に戻そうかとも考えたが、学位取得を後押しし勉強の機会を与えてくれた父の志を引き継ぐべく、父の学位記の上に自分の学位記を重ね再び額におさめ、わずかに置はいつの小さな院長室の壁に掲げた。

「関東ペンクラブ」設立会議へのお誘い

さる十月、全国同人雑誌振興会（会長・森啓夫氏）と文芸思潮（発行人・五十嵐勉氏）の両者代表名で、前記の設立準備懇談会への参加要請がありました。

趣意書のお旨をお伝えすれば「昨年、文学界の同人雑誌評がなくなり、大手出版社も軒並み赤字を抱え、文学界をはじめ群像、新潮、すばるなど商業文芸誌も存続が危ぶまれる時代になってまいりました。このような時代に、いかにして同人雑誌の活動が可能であり、どのように有意義な表現活動をしていくか、文学の創作の根幹にかかわる問題を時代状況そのものが突きつけております」として、インターネットによる新しい媒体の可能性も大きくはなっているが、その方法を活用しているとは言いい切れない、ここに同人雑誌のあり方、方向、共存の仕方、新しい交流の仕方が問われているように思う……。

そこで関東圏で、相互に刺激し合い、交流を図り、もって共通した文芸に関する活動が展開できるか、ざっくりはらんに話し合い、合同評会や文学史跡めぐりなどの活動もと、その可能性を求めて懇談会へのお誘いです。当クラブとしては暫く参加は見送ることにしました。